

保護者と保育者における子どもの見方の相違に関する調査

Investigation about the difference of a child's view in a guardian and a child-care worker

石 岡 由 紀*
森 本 玲 子**
岡 達 也***
高 田 哲****

はじめに

近年、発達に偏りのある子どもへの対応が注目されている。特に、発達の偏りを幼児期の早期に発見し、適切な関わりを持つことが、その後の社会性の発達に大きな影響を及ぼすことは多数報告されており、(井上・小林・石岡)¹⁾²⁾³⁾⁴⁾ 保育現場等においても「気になる子ども」への関心は高まってはいる。しかし、その介入(どのようにかかわるのか)ということに関しては、未だうまく機能していないというのが現状であろう。

発達に偏りのある子どもに対する早期発見、早期介入に関する興味関心が高まっている一方で、保育現場においては、保護者と保育者の子どもの発達のとらえ方に対する意識の違いがしばしば問題とされる。保育者が「気になる」と感じている子どもに対して保護者があまり「気になる」とは感じていない、もしくは「気になる」ことを認めることができない状況にある場合、保護者と保育者間の意思の疎通がうまくいかず、保護者と保育者が協力して保育するという基本的な関係が成立しないケースがあるというものである。

高田ら(2012)⁵⁾は、発達障害児の早期発見システムの開発として、行政、保護者、保育者、研究者らが協力して、子どもの発達をとらえ、そのサポートを行うことを目的とした調査研究を継続実施している。その研究では、保護者と保育者が同じチェックリストを用いて、子どもの発達を同じ視点でとらえることを目指すとともに、保護者が感じる必要性を最優先にサポート計画を作成するようになっている。

本稿では、その中でも特に保護者と保育者の子どもの見方または行動のとらえ方について焦

* 発達教育学部 児童教育学科

** 本学職員

*** 神戸親和女子大学大学院文学研究科教育学専攻

**** 神戸大学大学院 保健学研究科

点をあて、保護者と保育者の子どもの見方に対する相違について検討した。

1. 目的

保護者と保育者が同一のチェックリストを用い、子どもの見方や行動のとらえ方に関する相違について検討する。

2. 方法

対象：A市在住の年中児335名（男児162名・女児173名）の保護者と保育者

期間：2013年9月

内容：①32項目の質問に「はい」「いいえ」で回答

②発達が「特に気にならない」「ちょっと気になる」「とても気になる」で回答

③「はい」を1点、「いいえ」を0点として換算

3. 結果

保護者のつけた点数の人数の内訳は、5点未満は295名（88.1%）、5点から9点は、28名（8.4%）、10点から14点は、5名（1.5%）、15点以上は、7名（2.1%）であった。

一方、保育者のつけた点数の人数の内訳は、5点未満は、298名（89.0%）、5点から9点は、26名（7.8%）、10点から14点は、9名（2.7%）、15点以上は、2名（0.6%）であった（図1）。

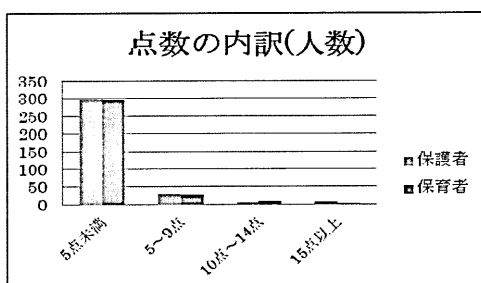


図1 保護者・保育者の点数内訳

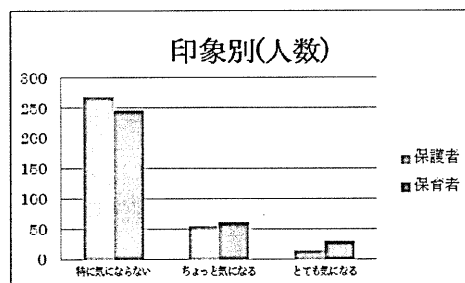


図2 保護者・保育者の印象内訳

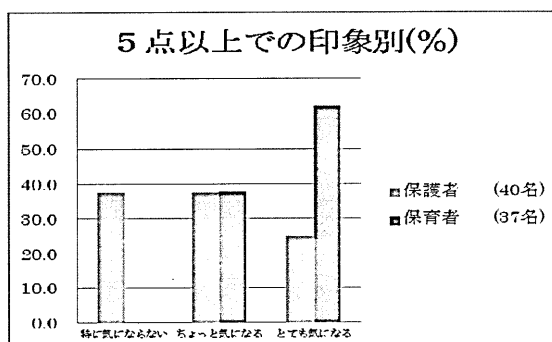


図3 保護者・保育者の5点以上での印象内訳

また、保護者のつけた対象児の印象別の人数は、「特に気にならない」は、268名(80.0%)、「ちょっと気になる」は、54名(16.1%)、「とても気になる」は、13名(3.9%)であった。

一方、保育者の印象は、「特に気にならない」が、245名(73.1%)、「ちょっと気になる」が、61名(18.2%)、「とても気になる」が、29名(8.7%)であった(図2)。

保護者のつけた点数で、5点以上の対象児は40名であった。その中で、保護者の印象が「特に気にならない」とした人数は、15名(37.5%)、「ちょっと気になる」は、15名(37.5%)、「とても気になる」は、10名(25.0%)であった(図3)。

一方、保育者では、5点以上の対象児は37名いた。その中で印象は、「特に気にならない」0名、「ちょっと気になる」14名(37.8%)、「とても気になる」23名(62.2%)であった(図3)。

次に、保護者と保育者の質問項目別で人数を比較したものが表1および図4である。ここでは、保護者と保育者の間で有意差があった項目を挙げる。

保護者より保育者の方がチェックをしている数が有意に高かった項目は、①「ことばによる指示が理解しにくい(保護者12名, 保育者41名)」, ②「年齢に応じた人物画を描くことができない(保護者11名, 保育者25名)」の2項目であった。

一方、保育者よりも保護者の方がチェックをしている数が有意に高かったのは、①「ひとり遊びが多い(保護者40名, 保育者21名)」, ②「物を取ってほしいときなど人の手を機械のように動かそうとする(保護者9名, 保育者3名)」, ③「奇声を発することが多い(保護者13名, 保育者5名)」, ④「偏食が多い(保護者51名, 保育者24名)」, ⑤「年齢に応じた排泄の自立ができていない(保護者23名, 保育者5名)」, ⑥「新しいことや見通しの持てないことに強い不安を示す(保護者38名, 保育者24名)」, ⑦「小さな子どもの泣き声など特定の音に異常な反応をする(保護者12名, 保育者3名)」, ⑧「ミニカーを並べたり, 水道の近くから離れないなどこだわり行動が見られる(保護者17名, 保育者8名)」, ⑨「特定のキャラクターや文字・数字にこだわる(保護者20名, 保育者6名)」の9項目であった。

表1 質問項目別人数の内訳

	保護者	保育者	p<0.05
視線が合わない	5	12	0.052
他の子どもに興味を示さない	2	2	1.000
一人だけ他の子どもと違った行動をとる	16	15	0.764
ひとり遊びが多い	40	21	0.001
物をもってほしいときなど人の手を積極的に持って動かそうとする	9	3	0.014
かわり方が一方的で、嫌なことがある	19	18	0.848
同年齢の子どもと対等な友だち関係が持てない	13	20	0.090
相手の気持ちを感知することが苦手である	26	30	0.506
いやなことがあるとパニックをおこす	25	21	0.395
同年齢の子どもと比べてことばが少ない	15	18	0.492
名前を呼ばれてもふりむかない	4	1	0.180
奇声を発することが多い	13	5	0.021
オウム返しやひとりごとが見られる	11	7	0.286
ことばは出ているが、コミュニケーション手段として活用されていない	5	9	0.206
同年齢の子どもが使わないような難しいことばを使う	12	5	0.071
しゃべり方が一本調子である	4	9	0.166
ことばによる指示が理解しにくい	12	41	0.000
ハイハイができない	4	1	0.180
偏食が多い	51	24	0.000
年齢に応じた排泄の自立ができていない	23	5	0.000
新しい事や見通しの持てないことに強い不安を示す	38	24	0.027
不器用である	21	31	0.077
つま先歩きなど奇妙な歩き方をする	6	4	0.528
年齢に応じた人物画を描くことができない	11	25	0.003
お茶を飲んだり、物を食べたりするふり(まね)ができない	0	2	0.158
小さな子どもの泣き声など特定の音に異常な反応をする	12	3	0.006
ニッカーを振ったり、音道の近づくのを嫌むなどかわり行動が見られる	17	8	0.039
多動である	29	22	0.194
衝動性が強い	24	21	0.591
特定のキャラクターや文字・数字にこだわる	20	6	0.003
他からの刺激で簡単に注意がそれる	72	67	0.593
何度注意されても同じ間違いをくり返す	46	47	0.903

表2 保育者と保護者の項目の一致率

	保護者	保育者	一致率
視線が合わない	2	12	13.3%
他の子どもに興味を示さない	1	2	33.3%
一人だけ他の子どもと違った行動をとる	10	15	47.6%
ひとり遊びが多い	15	21	32.6%
物をもってほしいときなど人の手を積極的に持って動かそうとする	3	3	33.3%
かわり方が一方的で、嫌なことがある	5	18	15.6%
同年齢の子どもと対等な友だち関係が持てない	8	20	32.0%
相手の気持ちを感知することが苦手である	10	30	21.7%
いやなことがあるとパニックをおこす	12	21	35.3%
同年齢の子どもと比べてことばが少ない	7	18	26.9%
名前を呼ばれてもふりむかない	0	1	0.0%
奇声を発することが多い	3	5	20.0%
オウム返しやひとりごとが見られる	2	7	12.5%
ことばは出ているが、コミュニケーション手段として活用されていない	2	9	16.7%
同年齢の子どもが使わないような難しい言葉を使う	1	5	6.3%
しゃべり方が一本調子である	0	9	0.0%
ことばによる指示が理解しにくい	7	41	15.2%
ハイハイができない	0	1	0.0%
偏食が多い	9	24	13.6%
年齢に応じた排泄の自立ができていない	5	5	21.7%
新しい事や見通しの持てないことに強い不安を示す	11	24	21.6%
不器用である	10	31	23.8%
つま先歩きなど奇妙な歩き方をする	1	4	11.1%
年齢に応じた人物画を描くことができない	7	25	24.1%
お茶を飲んだり、物を食べたりするふり(まね)ができない	0	2	0.0%
小さな子どもの泣き声など特定の音に異常な反応をする	2	3	15.4%
ニッカーを振ったり、音道の近づくのを嫌むなどかわり行動が見られる	3	8	13.6%
多動である	11	22	27.5%
衝動性が強い	7	21	18.4%
特定のキャラクターや文字・数字にこだわる	2	6	8.3%
他からの刺激で簡単に注意がそれる	26	67	23.0%
何度注意されても同じ間違いをくり返す	13	47	16.3%

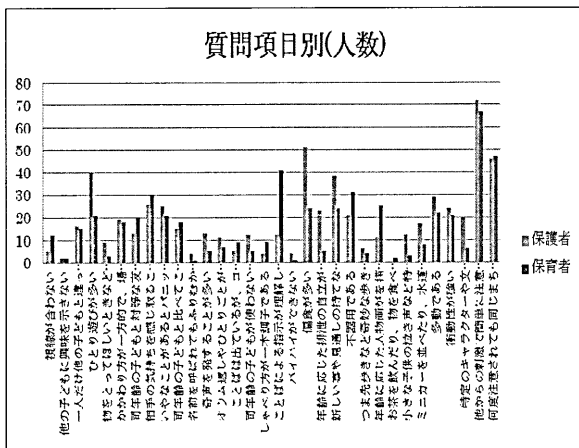


図4 質問項目別内訳

保護者がチェックをつけている上位5項目は「他からの刺激で簡単に注意がそれる (21.5%)」「偏食が多い (15.2%)」「何度注意されても同じ間違いを繰り返す (13.7%)」「ひとり遊びが多い (11.9%)」「新しいことや見通しの持てないことに強い不安を示す (11.3%)」であった。

一方、保育者がチェックをつけている上位5項目は「他からの刺激で簡単に注意がそれる (20.0%)」「何度注意されても同じ間違いを繰り返す (14.0%)」「ことばによる指示が理解しにくい (12.2%)」「不器用である (9.3%)」「相手の気持ちを感知することが苦手である (9.0%)」であった。

また、保護者と保育者の印象の内訳を表したものが表3と表4である。保護者が「とても気

になる」と感じている子ども13名のうち保育者が「とても気になる」と感じているのは7名、「ちょっと気になる」と感じているのは3名、「特に気にならない」と感じているのは3名であった。

一方、保育者が「とても気になる」と感じている子ども29名のうち保護者が「とても気になる」と感じているのは7名、「ちょっと気になる」と感じているのは12名、「特に気にならない」と感じているのは10名であった。

表3 保護者の印象と保育者の印象内訳

保護者		保育者	
とても気になる	13	7	とても気になる
		3	ちょっと気になる
		3	特に気にならない
ちょっと気になる	54	12	とても気になる
		17	ちょっと気になる
		25	特に気にならない

表4 保育者の印象と保護者の印象内訳

保育者		保護者	
とても気になる	29	7	とても気になる
		12	ちょっと気になる
		10	特に気にならない
ちょっと気になる	61	3	とても気になる
		17	ちょっと気になる
		41	特に気にならない

保護者と保育者の点数の一致率を表したものが表5である。保育者が5点未満をつけている子どもと保護者が5点未満をつけている子どもの一致率は91.3%，保育者が5点から9点をつけている子どもと保護者が5点から9点をつけている子どもの一致率は11.5%，保育者が10点から14点をつけている子どもと保護者が10点から14点をつけている子どもの一致率は11.1%，保育者が15点以上をつけている子どもと保護者が15点以上をつけている子どもの一致率は100%であった。

表5 保育者と保護者の点数の一致率

保育者		一致率	保護者	
点数	人数		点数	人数
5点未満	298	91.3%	5点未満	272
			5点～9点	22
			10点～14点	4
			15点以上	0
5点～9点	26	11.5%	5点未満	21
			5点～9点	3
			10点～14点	0
			15点以上	2
10点～14点	9	11.1%	5点未満	2
			5点～9点	3
			10点～14点	1
			15点以上	3
15点以上	2	100.0%	5点未満	0
			5点～9点	0
			10点～14点	0
			15点以上	2

3. 考察

本チェックリストを用いて5点以上をつけている保護者は40名（11.9%）であったのに対し、5点以上をつけている保育者は37名（11.0%）であった。しかし、その一致率は決して高いと言えない状況にある（表3，表4）。その中で、保護者が「とても気になる」または「ちょっと

気になる」と感じている子どもは25名（62.5%）であったのに対し、保育者が5点以上をつけている場合は、全員が「とても気になる」または「ちょっと気になる」と感じている子どもであった。このことから、保護者は5点以上をつけていても「気にならない」と感じるケースが多い一方、保育者は5点以上つけている子どもは「気になる」と感じていることがわかった。

自分の子どもを「とても気になる」または「ちょっと気になる」と感じている保護者は67名で全体の20.0%であったのに対し、保育者が「とても気になる」または「ちょっと気になる」と感じているのは90名で全体の26.9%であり、保護者よりも保育者の方が「気になる」子どもが多いことがわかった。

さらにその一致率についてみると、保護者が「とても気になる」と感じている子ども13名のうち、保育者が「とても気になる」と感じている子どもは7名（53.8%）であった。さらに「ちょっと気になる」と感じている子ども（3名）も含めると10名となり、保護者が「とても気になる」と感じている子どもの76.9%が保育者も「気になる」と感じている。また保護者が「とても気になる」と感じている子どものうち、保育者が「特に気にならない」と感じている子どもは3名（23.1%）にとどまった。

一方、保育者が「とても気になる」と感じている子ども29名のうち、保護者が「とても気になる」と感じている子どもは7名（24.1%）にとどまり、保護者が「ちょっと気になる」と感じている子ども（12名）を含めても19名（65.5%）であること、逆に保育者は「とても気になる」と感じているが保護者が「特に気にならない」と感じている子どもが10名（34.5%）いることから、保育者が「とても気になる」と感じている子どもを保護者が「気になる」と感じないケースが多いことがわかった。

上記してきたように、保護者と保育者の間には、子どもの行動に対する見方について、微妙な違いがあることがわかった。例えば保護者がチェックをつけている項目には、「偏食」や「年齢に応じた排泄ができない」「奇声を発する」など家庭内と保育現場という集団生活において子どもが見せる態度の違い、つまり、集団の中ではある程度我慢して行動するが、家庭ではそれが甘えとしてあらわれていることが要因の一つと考えられ、それは加齢に伴う社会性の現れであるとも考えられる。また発達障害の判定基準にある「家庭と保育現場など2つ以上の違う環境で見られる行動」というものには合致しないものである。

一方、保育者がチェックをつけている項目には、「ことばによる指示が理解しにくい」「年齢に応じた人物画を描くことができない」「不器用」など他の子どもと比べて「気になる」というものがあり、集団の中に入って初めて表面化される項目が含まれている。それは家庭の中では比較対象となる者がいないため、あまり気にならない行動であること、また家庭の中では本人がわかる言い方で伝えるとか、できないことを手伝うという個と個の関係が成り立つことによって、あまり問題視されないことが要因の一つであると考えられる。それらのことが、保護者と保育者の見解の違いにつながっているのではないだろうか。そういう意味では、保育者が気に

なる項目というのは、集団生活でつまづきを見せるいわゆる自閉性障害を含む発達障害のある子どもの行動につながるとも考えられ、発達障害のある子どもの早期発見には有効ではないかと考えられる。しかし、その一方で、個別にかかわることによって、克服できるケースやその年齢群には発達の幅も大きく、個性の範囲に納まる行動であったり、加齢に伴う経験知により減少していく行動も含まれていることが考えられ、保育者の「発達障害ではないのか？」という過剰な危惧によるラベリングに発展しないように注意する必要があるだろう。

本調査によって、保護者と保育者の間には、違う視点で子どもを見ている傾向があることが示唆された。保育者の視点は今後の発達障害児早期発見における有効な手段として、その精巧度を高める必要性がある。さらに保育者は、保護者と保育者の間にある見解の違いを保護者にどのように伝え、それをどのように共有し、子どもの発達支援、または家族支援につなげていくのかということを考えて保育または家族支援を展開していく必要があるものと考えられる。

4. 今後の課題

保育者による子どもを見る視点は、子どもの発達支援を行っていくにあたって、有用なとらえ方であると考えられる。今後、保育者のスキルアップにむけて、子どもの行動を観察する視点をより明確化するとともに、また、発達障害に対する知識や理解を深めるための研修やケース検討会等を継続的に実施していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 井上雅彦『家庭で無理なく楽しくできる生活・学習課題46—自閉症の子どものための ABA 基本プログラム』学習研究社 2008
- 2) 小林幸代・小林信篤・佐々木正美「自閉症児への支援技法である構造化における評価の重要性」川崎医療福祉学会誌 vol.19 No.2 2010
- 3) 石岡由紀・細木玉恵「広汎性発達障害児の表現活動に関する一考察—描画活動を通じて—」神戸親和女子大学大学院研究紀要 第7号 2011
- 4) 石岡由紀・細木玉恵・岡達也・森本玲子「発達障害児における教育支援環境に関する研究—物理的構造化と時間的構造化の効用—」神戸親和女子大学教育センター紀要 第9号 2013
- 5) Yuki Ishioka, Satoshi Takada「A study for the development of a checklist for autism spectrum disorders in young children」vol.27 2012